

3. 集落の歴史的風致

伝統行事・祭礼にみる歴史的風致

江戸時代の堺と周辺集落は、米ほか商品作物の産地とその集散という関係だけでなく、日常生活でも深く結び付き、堺奉行が近郊農村を「堺付」として支配していた。江戸時代の新田開発等の進展により近郊に新たな集落が形成されるなか、堺の中心部との関りを持ちながらも、その土地の社会的・自然的環境に即した多様な集落の個性が形成され、特徴的な祭礼・行事が行われてきた。

堺の代表的な民俗芸能のひとつである「上神谷のこおどり」は、旧泉北郡上神谷村大字鉢ヶ峯寺(現在の南区鉢ヶ峯寺)に鎮座していた延喜式内社國神社に伝わる神事舞踊として旧暦 8 月 27 日の國神社の秋祭りに村の若衆によって奉納されてきたと伝えられている。國神社のある鉢ヶ峯には、重要文化財に指定されている鎌倉時代後期建築の食堂と南北朝時代に建築された多宝塔が境内には伝わる法道寺がある。法道寺は寺伝によれば 7 世紀の中ごろに空鉢(法道)仙人が開いたとされる高野山真言宗の寺院である。古くは長福寺といい多数の寺坊があった寺院である。

「こおどり」は社会状況の変化や日露戦争(1904～1905)の影響などから、明治後期より中断していたが、昭和 8 年(1933)に東京でおこなわれた「全国郷土舞踊民謡大会」への出演を契機に、上神谷地域の協力のもと本格的に復興し、それ以降、櫻井神社に奉納されるようになった。現在は、毎年 10 月の第 1 日曜日に行われている櫻井神社の秋季例大祭で奉納されている。

櫻井神社は延喜式内社で、推古 5 年(597)と伝える古社である。境内の中央に位置する拝殿は桁行五間、梁間三間、一重、切妻造、本瓦葺で中央に馬道を設ける。建築様式やその技法から鎌倉時代の建築とされる建物で、現存する拝殿建築のなかでも最も古いもののうちのひとつであり国宝に指定されている。

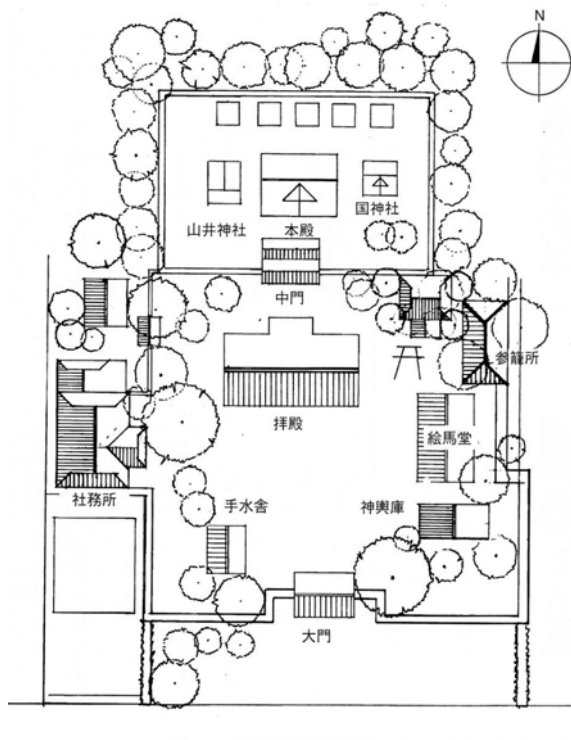
「こおどり」は踊りの中に「鎌倉踊り」や「具足踊り」があり、踊りや衣装に室町時代の風流踊りの特徴が見られることから中世には既に踊られていたとされており、大阪府内でも古い形態を残す民俗芸能として、昭和 47 年(1972)3 月 31 日に大阪府の無形の民俗資料に選択され、同年 8 月 5 日には、国選択無形民俗文化財となった。さらに平成 5 年(1993)には大阪府指定無形民俗文化財に指定され、現在は「堺こおどり保存会」を中心に芸能の保存と伝承がおこなわれている。



上神谷のこおどり



上神谷のこおどり(昭和 8 年(1933))



櫻井神社 境内平面図

「こおどり」の名称と役割については、諸説あるが、小谷方明氏は、「こおどり」を初めて紹介した小冊子『郷土舞踊鼓踊』（昭和7年(1932)）の中で「こおどりとは太鼓をうちて踊るが故に云ふとも云ひ亦一法中踊の二人が籠製の赤子の様な形せるものを負ひその上に子守に用ふるかぶせを看して踊れば児(子)を負ふて踊るが故に云ふとも傳ふ土人は多く後者を用ふ」と述べ、踊り手が太鼓を打って踊るので「鼓踊」という説と、鬼が背負っているカンコを子どもに見立てたので「児(子) おどり」という二つの説を紹介している。

西区浜寺石津町中4丁に鎮座する延喜式内社であり日本最古の戎社と称する石津太神社では、12月14日に日本書紀に記された蛭子命の誕生と漂着の伝説に基づく冬季例大祭として「やっさいほっさい」が行われる。漂着した戎神を漁師たちが薪を燃やし暖めたという伝説にちなみ、約2,800本のご神木と呼ばれる薪を境内に円筒形に積み上げ、「トンド」の火焚きを行う。そして、火伏せの後に戎神に扮した山伏役を担いで燃え落ちた赤々とした炭の上の火渡りを3度行い、神社境内の周りを「ヤッサイホッサイ」の掛け声とともに3周する神事である。薪の燃え残りを家に持ち帰ると、厄除けのまじないになるといわれている。



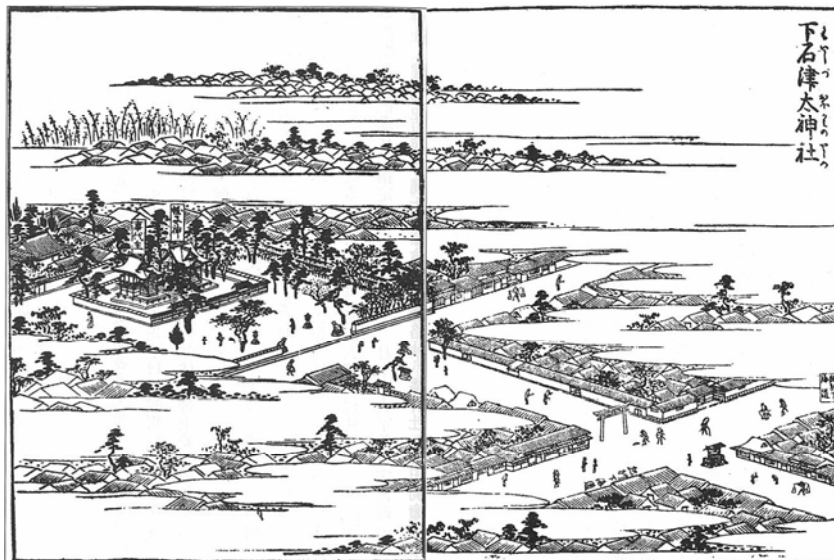
やっさいほっさい

境内の本殿は、その建築様式から17世紀中頃の建築とされるものである。北本殿は一間社流造、南本殿は一間社春日造とし、同時代の本殿が2殿とも現存している。拝殿はそれぞれの本殿に対応して馬道が2ヶ所設けられている。一の鳥居は石造の鳥居で寛永19年(1642)のもので、市内で最も古い鳥居のひとつといえる。二の鳥居は嘉永2年(1849)に建立され、その銘文には神社境内の変遷や建設に関わった人々を知ることができる。



石津太神社 本殿

この祭礼は泉州一の奇祭であるともいわれ、今も多くの人々にぎわう。



和泉名所図会「下石津太神社」

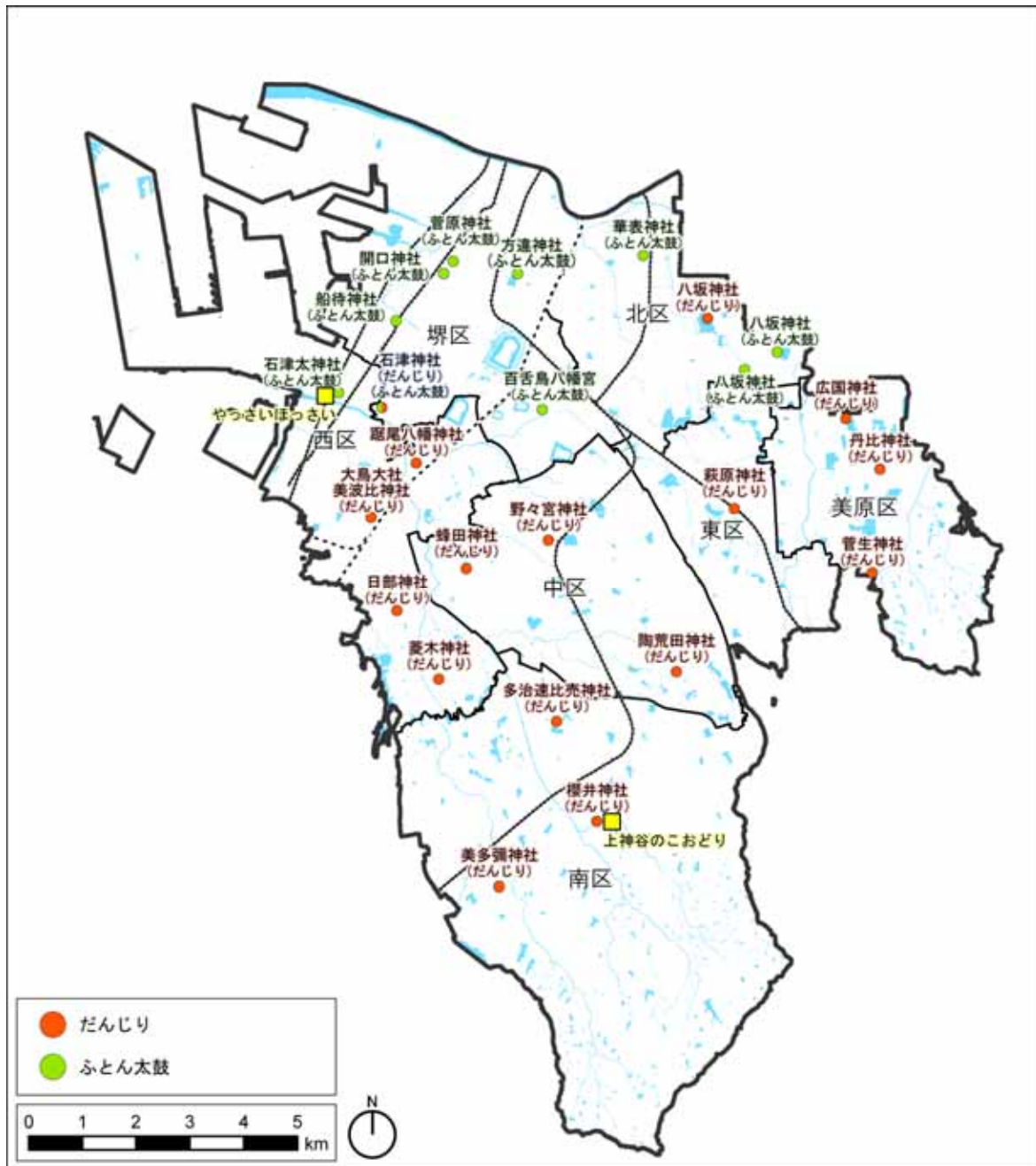
社殿上部に「蛭子神」の説明がある。

また市域全域では、四季を通じ様々な祭礼が行われている。特に秋祭りには、だんじりやふとん太鼓が地域の神社へ奉納される。だんじりは、一台につき百点近くの彫刻が施されており、各町により彫刻師、題材も様々であり大変豪華なものである。ふとん太鼓は高さ約4メートル、総重量約3トンにも及ぶ。一斉に担いで練り歩く姿はまさに勇壮華麗といえる。

以上のようにこれらさまざまな祭礼は、地域ごとに個性豊かなものとなって祭りを支える地域の人々に愛され、それぞれの地域の誇りとして、今もなお脈々と受け継がれている。



南区梅のだんじり



集落の伝統行事・祭礼の分布

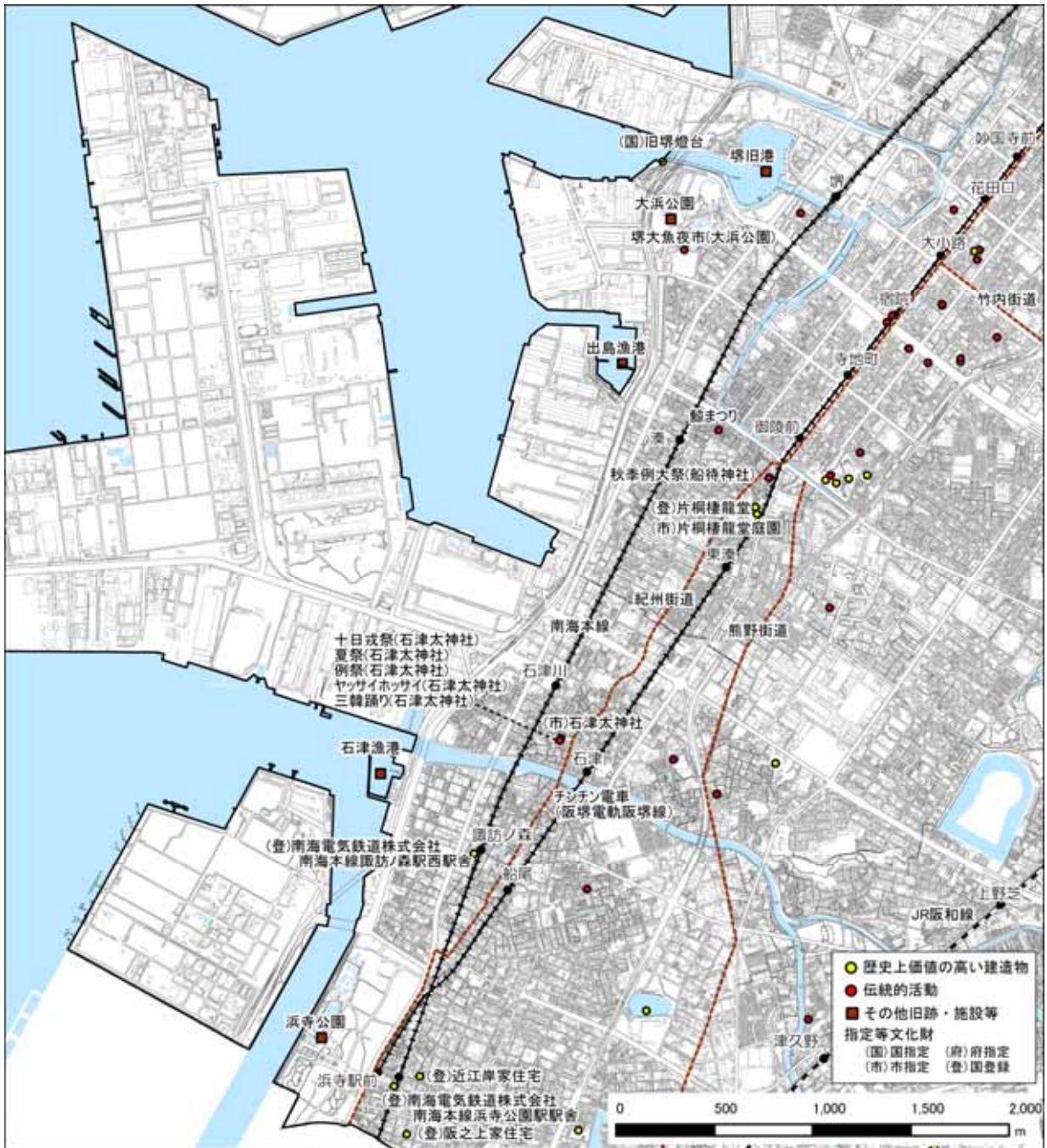
4. 海浜部の歴史的風致

海浜公園の行楽にみる歴史的風致

堺の海浜部は古くから景勝地としても知られてきた。平安時代の公家の藤原定頼の歌集『権中納言定頼卿集』に「さかかキと伝所にしほゆあみにおはしける」とみられるように、平安時代から海水を暖めて温浴する塩風呂の習慣があり、「しほゆあみ」の名所として平安貴族に広く知られていた。近代以降は浜寺公園や大浜公園を中心に、行楽地として今も多くの人々でにぎわう。



かつての浜寺海水浴場



「海浜部の歴史的風致」における歴史上価値の高い建造物と伝統的活動など